いろは文字鉾（その三十一―無心所著の文字鉾）

汐尻成泰

いろはにほへと　ちりぬるを　色は匂へど　散りぬるを
わかよたれそ　つねならむ　我が世誰ぞ　常ならむ
うゐのおくやま　けふこえて　有為の奥山　今日越えて
あさきゆめみし　ゑひもせす　浅き夢見じ　酔ひもせず
（ん）

色色の色　朧朧揚羽　春うらうらに
仏も放る屁　仁王の笑顔

碧山大和　常磐への道　千代の風あり
微温む水漏る　緑陰尋ぬ

累世生くるを　惜しみて世の和　和を棄つる馬鹿
世に戦火また　祟りの流れ　かの愚政者よ

冷酒辛味噌　粗酒にも酔ひつ　徒然琴音
寝酒宜しな

名代の棋士ら　　爛柯の酔夢　　無限の盤宇　　打つ石の余威

囲碁に菫の　　野花咲くおお　　鬼も戦く　　奇しき少女や

やよ盤見る間　　正に棋士の気　　今日も石問ふ　　不朽囲碁の子

劫に劫冴え　　栄誉摑む手

天下一ああ　　亜米利加撃つさ　　侍一気　　気力いや燃ゆ

勇者正夢　　名手の極み

見て面白し　　四季の景故　　ヱンヂンこの日　　久し振りやも

物見をば為せ　　拙車と話す

二〇二三年（令和五年）三月二十九日

註

無心所著（むしんしょぢゃく）＝一句ごとにばらばらのことを言い、全体としてナンセンス、という意味。万葉集巻十六には嗤笑歌（ししょうか）が多いが、「心の著（つ）く所無き歌」二首を載せている（付1）。ここではとりとめのない文字鏝にこの言葉を拝借した。

春うらうらに＝うらうらに　照れる春日（はるひ）に　雲雀（ひばり）あがり　情（こころ）悲しも　独りしおもへば（巻十九―四二九二）。

爛柯（らんか）＝囲碁の異名。山に入った樵（きこり）は童子たちが碁を打っているのを見て時間のたつのを忘れ、気づいたら斧の柄が腐っていた、という故事から。（何度か使った）

無限の盤宇（ばんう）＝囲碁の盤上無限の世界。宇は、そら、てん、無限の空間。天宇（おおぞら、天下）ということばに倣った。

打つ石の余威（よゐ）＝余威は、成し遂げた後になお残る勢い。着手の働きが効果的である。

囲碁（ゐご）に菫（すみれ）の　野花咲く＝四年前二〇一九年四月、十歳0カ月の少女、中邑菫（なかむらすみれ）が史上最年少のプロ棋士（初段）となった（日本棋院の英才特別採用推薦棋士）（付2）。二〇二二年、三段。二〇二三年二月、十三歳十一ヵ月で女流棋聖のタイトルを奪取、史上最年少タイトル保持者となる。入段した時のインタビューで「中学生のうちにタイトルを取りたい」と言ったのを実現させた。今後も期待されるが、テレビも一般紙も、将棋の某棋士は何かと取り上げるが、囲碁は棋聖名人の頂上対決も、本因坊十一連覇も、中邑菫の話題も知らぬ顔。

劫に劫冴え＝タイトル獲得を決めた三番勝負第三局では劫が三度現れた。

拙車と話す＝マイカーの運転を車との会話ととる。拙車は「その22」で使った。拙者の車。

（付1）心の著く所無き歌二首

吾妹子が　額に生ひたる　双六の　牡牛の　鞍の上の瘡（巻十六―三八三八）

私のカミさんの額に生えている双六の大きな牡牛の鞍の上の腫物。

わが背子が　犢鼻にする　円石の　吉野の山に　氷魚そさがれる（巻十六―三八三九）

うちの旦那が褌にする丸い石の、吉野の山に氷魚（琵琶湖の小鮎の稚魚）がぶら下がっている。

（付2）昨年二〇二二年九月、関西棋院で九歳四ヵ月の藤田怜央少年が英才採用特別規定により初段となった。世界最年少の初段といわれる。

後　記

まとまりのないことを続けた。そもそもが言葉遊びのしりとりであるから、深く考えないことにした。出来ればずっと前の「その二」のようなものを作りたいが、どうも意味のつながりにとらわれる。

二〇二三年（令和五年）四月三日